



Vol.130
2013年10月15日

発行

発行人 岡本和久
I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社【ホームページ】
〒150-0012 東京都渋谷区広尾1-8-6広尾186ビル7階
TEL : 03-5789-9821 FAX : 03-5789-9822
お問い合わせ : [メールフォーム](mailto:maq@i-owa.com)

今月の ひとこと

伊勢神宮では20年に一度の遷宮が執り行われました。私も遷宮の直前の週にお伊勢参りをさせていただきました。ほぼ、毎年、お参りに行っているのですが、行くたびに、目を見張るばかりの巨木と五十鈴川の清流、その間にある白木のお社に感動をします。20年に一度という技術と文化の伝承が延々と息づき、我々はみな自然の恵みのおかげで生かされていることを感じます。

話は変わりますが、株式投資には「応援」投資と「おかげさま」投資があります。自分が好きで応援したいと思う会社の株式を買うのが応援投資、我々が毎日の生活でお世話になっている会社をまとめて全部買うのが「おかげさま」投資。言い換えれば応援投資は個別銘柄選択のアプローチ、おかげさま投資はパッシブ運用のアプローチです。式年遷宮を見ていると我々の生活を支えてくれるすべての産業と企業を「おかげさま」という気持ちで、子々孫々の代まで保有し続けていくのが日本的な長期投資のありかたなのかなという思いを強くします。

FACEBOOK上でクラブ・インベストライフの仲間が活発な議論をしています。FACEBOOKに登録している方、ぜひ、ご参加ください。(2013年10月10日現在で参加者数は1673名です。まずは2000人を目指しましょう)

特集1 「円」と「縁」：ふたつの御「エン」を大切に生きる

岩國 哲人氏 VS. 岡本 和久



岩國哲人さんは、私にとって日興証券の大先輩です。当時、海外で大活躍される岩國さんは若造の私にとって憧れの存在でした。その後、外資系証券会社で活躍され、出雲市長に転身され、さらに、国政に打って出られ衆議院議員として活躍されました。現在は米国シカゴに居を移され、様々な提言活動を活発にされています。出雲市長や国会議員としての岩國さんの活躍はご存じの方も多いと思いますが、若き日の岩國さんが証券市場に起こした多くの改革はあまり知られていないかも知れません。日本の証券市場史の点からも貴重な体験談を伺えました。

 [読んでみる](#)

特集2 小田原が動く！地域で自然エネルギー投資を

講演：伊藤 宏一、レポーター：川元 由喜子



小田原市役所前の倉庫の上にある発電システムは、東日本震災の起こる1ヶ月前に設置されたものです。震災以前から、エネルギーを通じて地域の自立を図ることを目指して、再生エネルギー事業に取り組んでいたのです。3.11後、環境省の公募で採用され、去年の12月には、再生可能エネルギー事業会社設立までこぎつけました。地元の企業が出資して、資本金は3400万円。パネル設置などの工事にも着手し、来年の初めに事業を開始、売電収入を得るべく、今動いています。この9月からは、市民出資の仕組みを作って募集を始める運びとなっています。

 [読んでみる](#)

特集3 I-OWA マンスリー・セミナー フリー・ディスカッション：老

クラブ・インベストライフとは？

人生を通じての長期投資は孤独な長旅です。この長旅に耐え、大きな喜びを得るには、資産運用を行うための基礎となる知識と孤独な旅を支えあう仲間が必要です。「将来の自分はいまの自分が支える」ほかない時代、クラブ・インベストライフの活動は、豊かで幸せな人生のための投資を目指しています。

毎月、ネット上で会報誌を公開するほか、FACEBOOKやTwitter上で議論の場を提供し、各地でのセミナーを開催しています。

まったく投資の経験のない方も多数、参加しておられます。大手金融機関から完全に独立しているので、特定の商品をお勧めすることも販売することも一切ありません。

<FACEBOOK、TWITTERへの投稿の際のお願い>

1. 個別商品の販売・推奨、あるいはそれに類する投稿はご遠慮ください
2. 発言はあくまで個人としてのものとしてください
3. 企業広告はご遠慮ください

I-O ウェルス・アドバイザーズのメール・マガジン

メルマガへのご登録は下記のメールアドレス宛に、空メールを送信下さい。購読は無料です。

maq@i-owa.com

毎月15日配信 **無料**

Facebook

Facebook上のグループ、クラブインベストライフ
<http://www.facebook.com/groups/investlife/>



Facebookへの登録が必要です。リクエストボタンを押して入会申し込みをしてください。

Facebookへはこちらをクリック



Twitter上のグループ
クラブインベストライフ
http://twitter.com/c_investlife

Twitterへの登録が必要です



@c_investlifeさんをフォロー

荘、知足、幸福度について

伊藤 宏一、岡本 和久、他

バックナンバー

一覧



岡本| 私の著書、「老荘に学ぶリラックス投資術」を、東京外国語大学大学院にいたアレクサ・カウイングさんが翻訳してくれました。今日はアレクサさんにもお出でいただいているので、まず、少し、翻訳する時は、どんなところが難しかったなど聞いてみたいと思います。

 [読んでみる](#)

- 2013年09月15日発行 Vol.129
- 2013年08月15日発行 Vol.128
- 2013年07月16日発行 Vol.127
- 2013年06月17日発行 Vol.126
- 2013年05月15日発行 Vol.125
- 2013年04月15日発行 Vol.124
- 2013年03月15日発行 Vol.123

特集 4 中国がわかるシリーズ 13 [東] 漢の衰亡

ライフネット生命株式会社 代表取締役会長兼 CEO、出口 治明

2世紀後半から中国は長い寒冷期に入ります。人心も政治も不安定な時期に入り、社会は騒乱が続きます。そして、三国志の時代が始まります。お隣の倭国では卑弥呼が王位についたころです。

 [読んでみる](#)

バックナンバー

2012年12月までに発行されたインベスライフをご購入いただけます。



購入・詳細

インベスライフ応援団のブログ

あいうえお順、敬称略

紹介一覧はこちら

 [伊藤宏一の「近現代日本と貯蓄」—貯蓄は美德なのか—](#)

伊藤 宏一

 [右脳インタビュー](#)

片岡 秀太郎

 [実践コーポレートガバナンス研究会・ブログ](#)

門多 丈

 [鎌田泰幸のブログ](#)

鎌田 泰幸

 [会長 澤上篤人のレポート](#)

澤上 篤人

 [世代を超える想いの滴](#)

渋谷 健

 [真マネー原理](#)

滝沢 伯文

 [About Money, Today](#)

竹川 美奈子

 [一日一言ブログ](#)

竹田 和平

 [出口治明の提言：日本の優先順位](#)

出口 治明

 [積立王子のブログ](#)

中野 晴啓

 [CFA流「さんない」投資塾](#)

日本CFA協会

 [SRIのすすめ 未来の測り方](#)

速水 禎

 [毎週3分で、資産運用の成功へ導くメルマガ！](#)

尾藤 峰男

 [馬淵治好の凸凹珍道中](#)

馬淵 治好

 [森本紀行はこう見る](#)

森本 紀行

参考データ・コーナー

基本ポートフォリオのパフォーマンス

データ提供：イボットソン・アソシエイツ・ジャパン/投信まとなび

9月末までの過去10年間の二資産型ポートフォリオのパフォーマンスは、積極型がリターン6.57%、リスク18.57%。成長型が同、5.57%、13.63%、安定型が同、4.37%、9.33%でした。詳細は以下で。

 [読んでみる](#)

投信データ・ウォッチ

データ提供：イボットソン・アソシエイツ・ジャパン/投信まとなび

今月は純資産額トップ20ファンドのパフォーマンスを比較していただきました。

 [読んでみる](#)

I-OWAたより

マンスリー・セミナーより「老荘に学ぶラックス投資術」

講演：岡本 和久、レポーター：川元 由喜子

老子や荘子が生きたのは春秋から戦国時代、君主がどのように国を治めていくかというのが非常に大きなテーマで、多くの思想家が競い合って議論する百家争鳴の時代でした。国を治めるのと資産運用とは、実は非常に似た部分があります。金融資産のポートフォリオが自分の国、それを行政単位に分けて治めるように、資産クラスごとに分けて一番いい「長」を選ぶ。

「長」は投資信託で、「民」に当たる銘柄をたくさん持っているというわけです。老荘思想のいちばん基本にあるのは「道（タオ）」とあって、宇宙という現象が出来あがる前からあった法則性、自然法、時空を超越したエネルギーのようなものだと私は理解しています。老子も荘子も、タオに沿った生き方こそ、我々が最もラックスできるということを悟ったのです。その教えの中から、投資にも生き方にも役に立ついくつかをご紹介します。



[読んでみる](#)

岡本和久のI-OWA日記

★お伊勢参り（2日目） ★お伊勢参り（1日目） ★九月花形歌舞伎 ★今週の「うまい！」灯明そば膳@元屋 ★資産運用「気づきのタネ」（104）マネー教育は家庭から ★資産運用「気づきのタネ」（103）超金融緩和とその後 ★9月15日、I-OWAマンスリー・セミナーが開催されました ★マネー・ライフに寄稿「マネー教育は家庭から」

[詳細はこちらをご覧ください。](#)



セミナー案内

マンスリー・セミナーは、個人投資家の方が、ゆたかでしあわせな人生をおくるために必要なおカネの知識を体系的に学んでいただくためのセミナーです。証券アナリスト歴15年、資産運用歴15年の岡本和久CFA®が、資産運用の理論と実践法をわかりやすく解説します。また、毎回、ゲストをお招きし、さまざまな分野の講義もしていただきます。次回は10/20（日）、その次は11/17、共に12:30～16:30@東京都渋谷区広尾1-8-6-7F（当社オフィス）で開催です。プログラムは下記サイトをご覧ください。

[詳細はこちらをご覧ください。](#)

Page Top

[バックナンバー](#) | [お問い合わせ](#) | [ご感想](#)

Copyright © I-O Wealth Advisors, Inc. All rights reserved.



「円」と「縁」:ふたつの御「エン」を大切に作る生き方

対談:岩國 哲人氏、岡本 和久

岩國哲人先生(以下、岩國さんと呼びさせていただきます)は、1971年に私が入社した日興証券の大先輩です。私は国際金融部に配属になりましたが、当時、岩國さんはパリの支店長等をされており、その活躍ぶりは東京オフィスにいた若造の私にとって本当に憧れの存在でした。その後、岩國さんは外資系証券会社で活躍され、出雲市長に転身され、さらに、国政に打って出られ衆議院議員として活躍をされました。現在は米国シカゴに居を移され、グローバルな視点から様々な提言活動を活発にされています。この度、帰国されたとき、貴重なお時間を頂戴し、幅広いお話をお伺いすることができました。この対談は岩國さんも私も日興証券に席を置いていたことから日興証券に関する話題が中心になっていますが、60年代から70年代にかけての証券界は「銀行に追いつけ、追い抜け」の気運と活気に満ちていた時代でした。出雲市長や国会議員としての岩國さんの活躍はご存じの方も多いと思いますが、若き日の岩國さんが証券市場に起こした多くの改革はあまり知られていないかも知れません。貴重な体験談です。

岩國哲人(いわくにてつんど)氏プロフィール

77歳。日興証券、モルガン・スタンレイ投資銀行、メリル・リンチ社日本法人の社長・会長などを経て1989年、出雲市長に就任。「行政は最大のサービス産業」の持論をもとに、ショッピングセンター内に行政の土・日サービスコーナーを設置するなど多くの行政改革を実行。1996年、衆議院議員に当選、連続4期を務める。日本の関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科の客員教授のほか、米国・バージニア大学、中国・南開大学、韓国・東西大学の客員教授を務める。現在は米国シカゴに居を移し、幅広い政策提言活動などを行っている。

<円と縁、二つの「エン」を大切に作る>

岡本 | このたびは夏の甲子園で高校野球をご覧になるための来日と伺いました。

岩國 | はい。お盆のお墓詣りもそうですが、今年で56年間、一回の休みもなく連続で「出場」(笑)しています。

岡本 | 岩國さんは出雲のご出身だと思いましたが、実は大阪の生まれなんですね。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岩國 | 6歳の時に父が亡くなりました。その頃から戦争は激しさを増し、大阪が爆撃される前に私の母は私と妹を出雲に逃したのです。出雲であれば大丈夫だろうと考えたのでしょう。ですから、生まれは大阪、曾根崎小学校に入学しましたが、卒業することはなく、それからずっと出雲で育ちました。そういうことがあったので、出雲の人たちは私を市長にしたいと思ってくれたのだと思います。小さい時から母親と一緒に農業を一生懸命手伝ってきました。日本では農業をしている子供は信用されるんですね。それから、先祖を大切に。お墓参りには必ず帰ってくる。そして同窓会には必ず顔を出す。これらの条件が揃えば、地元の人からは信頼されます。それもあって、私は出雲市長に選ばれたのだと思っています。



岡本 | やはり「ご縁」を大切に、地縁、人の縁などですね。甲子園に毎年必ず来られるのもご縁を大切にしているということですね。

岩國 | そうです。甲子園のマウンドの土を頂いて出雲市の木造のドームはできています。そのお礼です。証券や銀行など金融機関で働く人は「円」を大切にしなければいけない。私はその円ではないもう一つの「縁」を大切にしなければいけないと考えています。両方の「エン」を大切にすることができる人はそれほど多くない。マネーの円を大切に人はいっぱいいますよ。しかし、日本人として生まれたもっと大切な縁をみんな忘れてる。私が特に強調したいことは二つのエンを大切にすることです。

<ケネディーの壁>

岡本 | 岩國さんは日本の証券市場が最も発展した時期にグローバルな活躍をされ、世界的な視野からその進化を見てこられました。最近の20年間も含めて岩國さんの高い立場から日本の証券市場をご覧になってどのような感想をお持ちか、非常に興味があります。

岩國 | 岡本さんはケネディーが大統領だった頃はどこにいましたか



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本 | 私が高校三年の時にケネディー大統領が暗殺されました。その時は東京にいました。その翌年、1965年にニューヨークの大学に入学しました。その後、67年まで滞在しましたが、ベトナム戦争がどんどん激化する中で、大学のキャンパスはかなり荒んだ雰囲気だったことを覚えています。18歳になると全員が徴兵局に登録に行かなければいけない。ルームメイトも誕生日に落ち込んでいたのを覚えています。当時は国民皆兵でしたからね。成績が悪いとベトナムに行かされるというようなことも言われていました。日本の大学に戻り、とても明るい雰囲気みんな楽しそうなのにびっくりしたものです。楽しそうに反戦歌を歌っていましたよね。(笑)

岩國 | そうですか。ケネディーは大統領として非常に期待され、いまだに歴代のアメリカの大統領としてベスト10の中に入ることが多いのですが、しかしケネディーが本当に経済のことをわかっていたのか、私は疑問に思っています。彼は特に経済のことを勉強しているわけではない。経済的な発想もあまり感じられない。その意味では劣っていたと思います。ケネディーという大統領をもう一回評価し直す必要があると思っています。ケネディーが行ったアメリカのための大きな失策をもう一度考える必要があると思います。それが世界に、そしてアメリカにどのようなツケを残したか。そのような発想とか評論というのはほとんど見当たりません。ベルリンの壁でケネディーは「私もここに立っている以上はベルリンの市民だ(イッヒ・ビン・アイン・ベルリーナ)」と言っています。そのような発想は非常にアピール性がある。

一方で「ベルリンの壁をなくせ」と叫んでおきながら、世界の金融市場の中に金利平衡税というドルの壁を作ってしまった。それが、その後、どのように大きな負担を世界の金融市場に残してしまったか。その検証を私はやってみるべきだと思います。

<世界初のボンド・ファンドを入社一年目に開発>

岡本 | 確かにそのような視点からケネディーの政策を考え直しているという論評はほとんど無いのではないかと思います。それは徐々に日本の資本市場にも大きな影響を持ったのだと思いますが、日本の市場を考えると、1960年に岩國さんが中心となって、日興証券が開発をしたボンド・ファンドがありましたね。あの商品は日本の資本市場にとって非常に大きな意味を持ったものだと考えています。

岩國 | 世界で初めて株式ではなく債券のファンドを作ったのです。アメリカでも債券の缶詰を作るという発想はなかった。株式の缶詰ばかり。私はそのような証券の缶詰を2つ作りました。一つは、岡本さんがお話しになった「ボンド・ファンド」、もう一つは「ジャパン・ファンド」です。

硬直した銀行の預金体系しか知らなかった日本の投資家に、流動性のある債券の缶詰を



長期投資仲間通信「インベストライフ」

提供する。そして、1万円単位の買い付けという世間の常識を覆して1円単位とした。1円単位とすることによって、再投資による複利効果が1円単位でできる。証券会社は1万円単位の資金しか扱わないという常識をぶち壊すことができた。銀行では1円単位で複利効果を楽しむことができるが、証券では1万円単位でなければならない。1円単位のお金は価値がないという常識の壁を破ることができた。したがって有利性がさらに増したわけです。流動性も増した。それが、「銀行よ、さようなら、証券よ、こんにちは」という言葉を生み出した。言わば、日本における金融戦争、金融革命の始まりだったと言えるのではないのでしょうか。

岡本 | できあがってみれば、なるほどと思うのですが、まったく何もないところからそのような発想を得たと言う事は素晴らしいと思います。どのようなことがきっかけで着想を得られたのでしょうか。

岩國 | 新入社員のとき、私は電車で通勤していました。手は吊り革に捕まりながら頭はその間、働いている。その電車内勤務時間を、アイデアを生み出すための時間に使いました。山手線に乗れば東京駅から東京駅に戻ってくる。12カ月たったら利子という乗客を降ろして1万円円で再出発する。10年間であれば毎月1本ずつ120本のファンドを作らねばならないのでは、証券会社にとって大きな事務負担になる。そこでオープン・ファンドにして、いつでも乗れる、いつでも降りられる様にすれば良いと考えたのです。これ山手線と同じでしょう。山手線の中でこういう発想が生まれる。12か月で降りる。小学1年生は小学2年生になれば新しい小学1年生が入ってくる。12本のファンドがあれば、それ以上、永久に新たなファンドを作る必要は無い。これにより少ない管理経費でボンド・ファンドの運営ができると判断したのです。多くの資金をこのファンドに導入することができました。それは電車に乗って通勤をした男の発想だったのです。それがなければできなかつた。

岡本 | 新入社1年目に「マル優制度」とボンド・ファンドは確か岩國さんが入社2年目に商品化した案件でしたよね。素晴らしいと思います。発想も非常にイノベティブです。また、23歳の社員の声を取り上げて商品化した日興証券という会社にも何か非常な若々しさを感じますね。

岩國 | 大蔵省は証券4社という名のもとに、4社には同じ仕事を同じ時期にさせるという方針を持っていた。これが公平性であると考えていた。私は「そんな不公平なことがあるか」と主張しました。日興証券しか考えなかつたことを、他社は頭を使わないで日興証券と同じ商品の販売許可を得ると言う事はおかしい。散々、反論したところ、大蔵省も妥協し、「それではこの商品は、日興証券だけに認めましょう。しかし、翌日、他3社にも認めます」ということになった。たった24時間の差をつけたのです。これは、しかし、大蔵行政の歴史の中で四大証券の1社だけに先に認可を与えた初めてのケースとなった。たった24時間の差ではあっても、日興証券が開発をした商品であるという実績は残します、ということでした。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岡本 | 岩國さんはいつも新鮮な発想をお持ちですがその源泉はどのようなところにあるのでしょうか

岩國 | それはご縁を大切にすることだと思います。一円単位にすること、管理コストをできるだけ下げること、全て投資家により多くの利益を提供できるようにするための方法でした。そのようなアイデアを大切にしている金融機関を当局は優遇すべきである。それが、本当の意味で公平な扱いとなる。これらのコンセプトを一つの商品に込めたのがボンド・ファンドだったと思います。そういうことを、今の金融機関の人に言いたいですね。原点を忘れるなど。さらに言えば、世界を見る時にアメリカの真似だけをしていたのでは仕方がない。アメリカだけを見ていたのではボンド・ファンドのような発想は出なかった。アメリカの真似をすることが国際化、アメリカの真似をする事がグローバル化であるというのは、頭が全然グローバルになっていないということでもあります。人のお金を大切にするという原点から見ればまだまだ永田町や金融機関の人たちの認識は甘い。

岡本 | おっしゃるように何でもアメリカの真似さえすれば国際化であるような錯覚があります。その証拠に、やたらに「日本版」ナントカという商品が多い。いつも海外のものを日本に導入して、それを日本版と名付けて顧客に提供している。岩國さんがおっしゃるように、それが本当に日本の投資家のためになっているのかという疑問もあります。

岩國 | 日本は文化も歴史も欧米よりもはるかに長く成熟をしている。ですから、欧米のものよりも良いという意味で日本版というのがあればいいのですが、「物まねしております」日本版では仕方がない。欧米より良いものを「日本版」の商品として出さなければいけない。

< 民も官も海外では同じフロアという衝撃 >

岡本 | その点で言えばジャパン・ファンドのように外国の投資家に日本の良い商品を提供しようという仕事も岩國さんは中心となって活躍されました。これも今までには全くなかったことですよ。

岩國 | 私の上司は当時、遠山直道副社長でした。東大の先輩でもあり、東大のサッカー一部のキャプテンをやっていましたからね。サッカーというのは野球の小さなボールよりもっと大きなボールでゲームをします。遠山さんは地球という大きなボールにチャレンジをしたのです。私は遠山さんとともに 1961 年にニューヨーク支店を設立するためにアメリカに行きました。そしてニューヨーク事務所をチェース・マンハッタン・ビルの 48 階に作ったのです。それまで、ウォール街の裏通りのようなところの小さな事務所を仮事務所としていたのを、チェース・マンハッタン・ビルに机や書類を運んだのです。当時、一階から 48 階まで直通で行くエレベーターがありました。それに驚きましたね。エレベーターというのは一階ずつ止まるものだと思います。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

っていた。ところが途中止まらないエレベーターがあった。これに私はびっくりしました。なるほど、一階ずつ止まっていたのでは時間がかかってしょうがない。当時、日本には 48 階建てのビルさえなかった。アメリカでは 60 階建ての建物の中に 48 階まで直通で行けるエレベーターがある。今ではそんなこと当たり前ですが、それは大きな刺激を与えてくれました。

岡本 | 60 年代も初めということを見ると、さぞ驚きも大きかったことだと思います。

岩國 | そして 48 階に、日興証券、大蔵省、日銀が並んでいた。日本ではこのようなことはありえなかった。同じフロアで、官と民が並んだ。それも私には非常に新鮮な驚きでした。日銀も大蔵省もニューヨークに来たら、同じ階で仕事しているのだ。上下関係がない世界なのだ。同じフロアで同じように朝から晩まで仕事をしている。そういう雰囲気のある場所が 48 階までノンストップのエレベーターで行ける。48 階では、日興証券も大蔵省も日銀もみな同等である。むしろ、日興証券の方がいろいろな新しい発想を持っていたかもしれない。日銀や大蔵省は勉強しているかもしれない。しかし、ビジネスに使える新しい発想が、彼らにどれぐらいあったのだろうか。当時はファックスなどなかったもので、テレックスでした。テレックスのテープが切れてしまうと、彼らが日興のオフィスに借りに来たり、あるいは反対にこちらが借りに行ったりする。小さな日本の大きな挑戦。そして大きなアメリカのマーケットの中で官も民も全く同等に活躍をしている。日興証券は隣の大蔵省が発行した国債を販売する。その資金は大蔵省が活用する。テレックスのテープを貸すだけでなく、資金の調達役目もする。その当時、東京にあった官と民の上下関係など全くなかった。

岡本 | チェース・マンハッタンにあった日興のオフィスは私も行ったことがあります。1972 年だったと思います。今から思えば小さなオフィスだったのでしょう。でも、当時の私には、「まさに海外店のオフィス。いつかここで働きたい！」と思ったものです。それがかなったのは、私が 2 年間のブラジル勤務を終えて 1975 年にニューヨークに転勤になったときでした。しかし、その時はもう、チェース・マンハッタンのビルではなく、もっと大きなマリン・ミッドランドのビルに越していました。60 年代の初めだと官民の差は想像を絶するぐらい大きかった。しかし、海外では平等だった。それは今からは想像しにくいほど衝撃的だったのでしょうか。

<日本株の缶詰、「ジャパン・ファンド」を設定>

岩國 | 「日本のために、日本のために、日本のために」といつも言いながら、日銀も大蔵省も自分で汗をかいていない。当時、資金不足であった日本のために、どうやって資金を調達するか、それを考えたのは 48 階の日興証券だった。日本の会社の発行している株式を缶詰にしよう。アメリカの投資家は日本の企業のどこに投資したらいいのか情報がない、知識もない、判断基準もない。それを提供している日本の証券会社もなかった。日興証券はそれをやろうとした。アメリカ人の投資家にとって、日立がいいか、東芝がいいか、それはなかなか



長期投資仲間通信「インベストライフ」

か難しい判断だ。しかし、日本という成長する国に対する関心は非常に大きなものがあった。とにかく、個別企業の情報がなかった。情報がなくても日本に投資ができるような手段を提供するのは日銀や大蔵省、日興証券の義務でしょう。答えを出したのは、日興証券、それが、ジャパン・ファンドだった。名前もわかりやすい。日本に関心がある人がすぐ買える。その缶詰の中には、おいしいソニーも東芝も日立もみんな入っている。そんなおいしい商品を提供する。我々の自慢ですけれども、そういうものをやったのが 1961 年の日興証券だった。ジャパン・ファンドは今でも存続し、米国で上場されていますよね。

岡本 | その時、アメリカの投資家の間で、当時はまだ新興国だった日本の株式を買うことに対する抵抗感のようなものはありませんでしたか

岩國 | わからないという不安はあったでしょうね。しかし、成長目覚ましい日本に投資をしなければ大きなチャンスを逃す。未来を買うチャンスを逃す。成長する国を買おう、成長する企業を買おうという投資家はアメリカにはたくさんいました。成長を買う、未来を買う、それでこそ投資家と呼ばれる資格がある。しかし、情報が足りない。日本の株式に詳しいアドバイザーもいない。どこに手を出したらいいのか、それがわからなかった。自分の大切なお金をどのテーブルに置くのが一番いいのか迷っている人がたくさんいた。迷っている人が多いという事は、それこそビジネスチャンスです。迷っている人がいなくなったらビジネスチャンスはなくなっている。証券会社も必要ない。迷っている大量のお金がある。これほどおいしい仕事は無い。これほどやりがいのある仕事もない。そういうやりがいのある仕事をするチャンスを絶好のタイミングで与えていただいたという事は、私が日興証券にいちばん感謝をすることです。野村もやっていない、大和も山一もやっていない。そのような投資対象を商品化することができた。日本の歴史の中で初めての事です。日本の株式市場の鎖国状態を破ったとも言えると思う。自らそれを打破したわけです。それに類する仕事っていうのはそれ以降あまりないですよ。そういう歴史を作ってきたのだという誇りは私たちにはありました。

<銀行と対等になりたい>

岡本 | 70年代に入って、今でいうサムライ・ボンド、海外の発行者による国内市場における円建て外債が次々に出た時も証券業界は競って欧州の発行者を募り、日本での発行を実現してきましたね。私は入社早々でしたが、あの当時は日興証券も、あるいは証券界全体が何か非常に勢いづいていて、どんどんイノベーションを実現していたような時期だったように思います。

岩國 | そうです。そして、社内もそういうことをやらせてくれるような風潮だった。その中でも特に日興のような自由闊達な雰囲気のある会社はなかったように思います。当時、新丸ビルにいまし



長期投資仲間通信「インベストライフ」

た。新丸ビルの日興本社の中で一番銀行に近いコーナーにあったのが債券部でした。その向かいには日本興業銀行がありました。金融界の実力者、ナンバー・ワンの銀行でした。大蔵省に対して対等にもものが言える銀行は日本興業銀行だけでした。そしてその銀行から湊守篤氏を日興は迎えました。三菱系と言われた日興でしたが、遠山直道副社長の結婚式の媒酌人を務めたのが、日本興業銀行の頭取でした。今では証券会社のトップの媒酌人は誰であろうと話題にもならないかもしれない。しかし、銀行と証券が激しく競合しているときに誰が仲人をするかというのは、実は大変なことだったのです。誰に仲人を依頼するか、それは三菱をはじめとしてみんなが関心を持っていた。だから、遠山直道夫妻の結婚式は色々な意味で日興がその名前を日本興業銀行にちなんで「日興」としたように、三菱から離れるわけではないが、その縁を大切にしつつ、なおかつ、興銀がバックにつく。そういうアナウンス効果のある出来事でした。

岡本 | 証券会社が「株屋」などと言われていた時代からそんなに経っていない当時ですから、銀行と証券の地位の格差は今とは比較にならないくらい大きかったでしょうね。

岩國 | ですから私はいつも日興のオフィスから、日本興業銀行の建物を見ながら、「興銀と対等、あるいは対等以上に仕事をする、それが証券の役目である」と思ったものです。そして日本興業銀行に頭を下げるだけでなく、日本興業銀行のワリコーという債券を日興が販売した。そういう意味では、静かに、静かに、大きな画期的なことが動いている、そのようなドラマが展開しつつある時期でした。

<時代の転機を象徴したサムライ・ボンド>

岩國 | そしてサムライ・ボンドと言う発想も、資本が足りなかった時代から、今度は多くの資金が日本に入ってきて、入ってきたものを外国で運用する、そのように発想が180度転換する時代でした。わずか10年ぐらいの間に100年分に相当するドラマがあった。大転換でした。今度はヨーロッパの発行者、デンマークとかスウェーデンとか、あるいは、欧州投資銀行など、欧州のために資金を提供してあげようという頭の切り替えの時期でした。それまでは誰もそのようなところに商売に行った人はいなかった。当時は何でもやらせてもらったので面白かったです。

岡本 | 私が入社したころ、岩國さんはパリにおられ、現地時間の深夜を過ぎた頃に長いテレックスがいつも入ってくるのを見て驚いたものです。支店長会議などでお帰りになったとき、遠くから拝見していても何か光り輝いているような気がしたものです。

岩國 | それは私だけではないでしょう。

岡本 | とにかく、国際部門の支店長会議は「綺羅星」のような方々が海外から帰国し、勢ぞろいを



長期投資仲間通信「インベストライフ」

していた。まさに憧れの姿でした。

岩國 | 国際部でも債券部でも私の周りにはたくさんのすばらしい人たちがいました。恐れを知らない会社でしたね。

岡本 | チャレンジ精神ですね。いろいろな規制の枠が取り払われていった時期で、若手が自由に活躍できる雰囲気でした。それが大きな飛躍のための原動力だったのだらうと思います。

<ケネディーの愚かな政策でユーロ市場が誕生>

岩國 | 日本はウォール街を尊敬しながら学んできたことは事実です。しかし、ウォール街のプレッシャーも受けてきたのです。そのウォール街といよいよ対決する時期がやってきた。ウォール街のモルガンとか、ファースト・ボストンとか、メリル・リンチとかと対決する時代になった。ドルは世界でいちばん大きな起債力を持った通貨でした。そのドル体制に対して、国際金融機関が対決できるようになったのは、ケネディーという大統領が愚かな政策をした結果です。これも大きなチャンスでしたね。ヨーロッパ、日本の金融界にとってね。「金利平衡税」によってドルに壁を作ってくれた。その結果、アメリカのドルという壁の外側にもうひとつの「欧州ドル」という通貨を使った自由な市場が出来上がることになった。

岡本 | ユーロドル市場ですね。

岩國 | ワシントンがコントロールできない、初めて自由な市場を作ってくれたのが、ケネディーという皮肉にも素晴らしい大統領だった。彼はそれを意識していなかったかもしれません。

ケネディーがウォール街の覇権を自ら否定した結果、世界の金融市場の中心がウォール街からロンドンのシティへ移り、シティを中心とするユーロ・マネー・マーケットが成立した。そして、それがヨーロッパを結束させて、今のユーロ・ゾーンができた。EU を育てた一番の功労者は、皮肉なことにケネディーだった。ユーロ市場の成立でお金の壁がなくなってきた。その結果、ヨーロッパは結束しやすくなった。ヨーロッパ各国の共通点が非常に多くなったからユーロ・ゾーンの統一ができたのです。

ユーロドル市場、言い換えれば自由ドル市場が誕生したために日本の証券会社の仕事も増えましたが、それ以上に日本の銀行は、今までできなかった証券の仕事もできるようになった。アメリカと日本は銀行と証券は兼業してはならない。それが欧州では兼業できる。日本の証券には3倍の追い風、日本の銀行には5倍の追い風。日本の銀行界にとっての大恩人はケネディ大統領であるということを忘れず、近く駐日大使として赴任されるケネディーさんのお嬢さんを丁重に歓迎される必要があります。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岡本 | 非常に長期的な視点での国際金融市場の興亡の歴史ですね。

岩國 | 今のEUの悩みも、逆に言えばそのお金のマーケットをコントロールし、責任を取るような体制もなく、政治家もいないことです。お金のマーケットは自由に発展してきた。しかし、悲しいかな、政治家はその自由なお金の世界がわからない。そういう政治面での遅れが目立つようになってきている。通貨というものは、その通貨を発行した国が責任を持つ、「通貨責任」がある。通貨責任というものが、その国の格付けにも影響をする。ドルの信認はアメリカの経済のコントロールがうまくいっているかどうかということが大切なわけです。我々にはそれが肌でわかります。しかし、それがネット世界ではわからない。ましてや、イタリアやドイツやフランスなどの問題が深刻化するにつれて、お金というものが大きな要素になってきていることを認識していない政治家がどのような政策をとるか、どういう責任を取り、どういう評価を受けるべきか、そういうところで鍛えられていないのです。ヨーロッパもアメリカの政治家もそこまで成長できていない。

岡本 | 「マーケット」という自由なグローバルな存在が経済の中心になっているのに、行政は相変わらず一国内の視野で規制によるコントロールをしようとする。この矛盾はマーケットに参加している人間でないとなかなか実感をもってわからないかも知れませんね。

岩國 | スペインなどヨーロッパ諸国では、一生懸命働いている人たちがいる。汗を出して働いてもそれが報われないような今、資本主義が問題を抱えている。「資本主義」というものは働けば幸せになれる。そして、それが力の弱い人を救う力を持っている。それが資本主義の素晴らしいところだと私たちは学校で教えられてきた。それを社会で実践してきた。夢があり、そのために働き、夢を実現してきた。世界のなかの基軸通貨はどここの国の通貨か、それは当時も今もドルです。そのドルのアメリカが、「通貨責任」を放棄した。結果としてケネディーはそれを宣言したとも言える。壁を作る、その上、アメリカが発行した通貨を、アメリカもどの国も、政治的な責任を取らない。無責任通貨、無責任マーケットというものを彼は作り出してしまった。その解決策を私たちは未だに出していない。

<「あんばい」内閣の問題点>

岩國 | そしてアベノミクス。その通貨無責任体制を日本のために見事に利用しています。自分の国の通貨を、安くすれば仕事が倍になるという。安くすれば、貿易が倍になる。ネーミングは素晴らしい。安くすれば倍になる、安倍(あんばい)内閣。これほど分かりやすい看板は無い。そうでしょう。私もこの政策を3年前から提案してきました。

岡本 | 結局、ケネディーの失策によって生じてしまった資本市場の問題が世界中に蔓延し、今日



長期投資仲間通信「インベストライフ」

のような不安定な金融市場を生み出しているということですね。それは延々といまに至るまで続き、しかも、グローバルに伝染している。日本もうまくそれを活用している。

岩國 | 国境のないグローバル企業が、まさに「あんばい内閣」の安くすれば倍になるというお手本を示してくれている。しかし、「あんばい」体制の中で、一般の人が本当に安心できるのか、あれは安心の「あん」であるべきでしょう。政治がやる事は安心を倍にすることなんですよ。通貨を安くしたり、株価を倍にしたりすることだけではなく、安心を倍にして欲しいというのが私の願いで、自民党に対する私の提言でもあります。私の提言はすべて安心を倍にするためのものです。「安心を倍にする」を読み違えて「安くして倍にする」政策だけを行い、働く人の所得は必ずしも増加しているとは限らない。「働く人のための社会保障が心配です」というのが、今、私が一番お話ししたいことのエッセンスです。分かっていただけでしょうか

岡本 | はい。確かに安くして倍にする政策は、いずれ何らかの副作用をもたらすだろうと思います。それが結果として安心を半分にする事にならなければいいなと願うのみです。先ほど二つの「エン」というお話をいただきましたが何かお金に対する大切さの感覚が失われてきているような気がしてなりません。それは大人の世界だけの話でなく、子供の世界でもそのような傾向が見られます、お金は欲しければもらえると思っている子が多い。その背景として、やはり非常に長期にわたって超低金利が続いているということだと思えます。金利が低いという事はお金の価値、特にその時間価値が非常に小さいということでもあります。低金利政策は必要だから行われた事は分かるのですが、それが非常に長く続いたことによる副作用が何か日本の社会を大きくゆがめているような気がしてなりません。

岩國哲人が渾身の筆力で書き綴った
明日の日本に見る希望、
豊かな田舎への願い、
役所の無駄遣いへの苦言、
東京部政への抗議、
竹下登首相のちよつとらしい話
自民党への苦言、
病んでいる地球への憂鬱、
税金はこうして守る提案、
怒りを忘れた政治家への語り、
環境はリストに挙べ、
アジア食糧安保・日本基地、



「二月三舟」第十二巻が
出版されました。

軽い皮肉とユーモア、どのページにも日頃から願った斬新な切口と
表現が貴方を待っています。定価1500円、好評発売中。
ご寄售の方は岩國事務所までご連絡下さい。

お問い合わせ先 岩國哲人事務所
TEL:03-3584-1892 FAX:03-6893-5009 EMAIL: mail@twakun.com

食の安心を
若者の職場を
医療の安心を
年金の安心を
株価二万円を
明るく元気な日本を
高速道無料の権利を
男女の平等な権利を



誰にも平等な教育を
誰にも平等な一票を
政治を国民の手に
拉致日本人を
日本の誇りを

とりかえす!!

私はその戦いを皆さんと
共に続けてまいります。

岩國哲人

以下、11月15日号へつづく



小田原が動く！地域で自然エネルギー投資を

— 地域エネルギーファイナンスの現状と未来 —

講演:伊藤 宏一、レポーター:川元 由喜子

小田原市役所前の倉庫の上にある発電システムは、東日本震災の起こる 1ヶ月前に設置されたものです。震災以前から、エネルギーを通じて地域の自立を図ることを目指して、再生エネルギー事業に取り組んでいたのです。3.11 後、環境省の公募で採用され、去年の 12 月には、再生可能エネルギー事業会社設立までこぎつけました。地元の企業が出資して、資本金は 3400 万円。パネル設置などの工事にも着手し、来年の初めに事業を開始、売電収入を得るべく、今動いています。この 9 月からは、市民出資の仕組みを作って募集を始める運びとなっています。

この事業会社の名前が「ほうとくエネルギー株式会社」。地元ゆかりの二宮尊徳が説いた「報徳」から採った社名です。地域に眠る水、光、木、熱などは、いわば自然の徳です。自然の中に徳が、人間が生きていくためのものがあり、それを掘り起こしていくわけです。同じく尊徳の説いた「分度」は、わきまえるということ。本当に必要としているエネルギーの量を知り、その内で生活や営みを立てる。また「推譲」は独り占めしない、ということ。こうした尊徳の思想を取り入れて、地域のために行動する、というのがこの事業のコンセプトになっています。実際に尊徳のしていた「五常講」の一つに端を発する相模信用金庫も、出資者に名を連ねています。

地域に根差し地域に貢献する会社であるためには、いろいろと工夫が必要になるわけですが、資本構成については、3つの考慮すべき点があります。まず地域における信用・信頼感があること。顔が見えて、この人はこういう人だと分かってなければいけない。かなり限られた、触れ合うネットワークがあって初めてそうなるわけです。2番目は、再生可能エネルギー事業に対する意欲と専門知識。そして3番目に中立性、これが重要です。特定の企業や団体のための事業と受け取られないよう、考慮します。自然エネルギーというのは地域のものなので、皆の力で支えていく。いわば地域合本主義です。

事業主体の公募に際しても、事業を実施する能力に加えて、市民参加の方法について現実的な提案があるかどうか、地域の人たちに還元できる仕組みを持っているかどうかという点が重視されました。その結果、ほうとくエネルギー株式会社が選ばれたわけです。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

小田原市のような動きは、特に昨年電力の固定価格買取制度が出来てからは、全国的に見られます。中でも注目に値するのが長野県飯田市で、「地域環境権」を定めた画期的な条例を作ったのです。条例で地域環境権が地域にある、と明言したことで、再生エネルギー事業は地域による権利の行使とされ、市が行政の範囲内でサポートできることになりました。これが信用の補完にもつながり、金融機関からの融資も受けやすくなったのです。



講演後半のテーマは、再生エネルギー事業のファイナンス事情について。一般市民によるものを含む出資の様々な形態、融資に関わる地域金融機関の役割、公的融資や寄付のあり方など、将来の展望も含めてお話しいただきました。



I-OWA マンスリー・セミナー

フリー・ディスカッション: 老荘、知足、幸福度について

伊藤 宏一、岡本 和久、他

岡本|私の著書、「老荘に学ぶリラックス投資術」を、東京外国語大学大学院にいたアレクサ・カウイングさんが翻訳してくれました。今日はアレクサさんにもお出でいただいているので、まず少し、翻訳する時は、どんなところが難しかったなど聞いてみたいと思います。

カウイング|金融と老荘思想の両方のテーマがある為、背景となる知識は少しはありましたが、勉強しなければいけない部分がありました。翻訳する時は、自分が意味を理解していないと上手く伝わらないですね。投資の話も中国の哲学の話も、一般の人には難しいというイメージがあります。岡本先生が、すごくわかりやすく書いていましたので、英語でも同じようにわかりやすく書くことを注意しました。非常に苦労しましたが、周囲の感想もよかったです。

岡本|アレクサさんを指導されていた鶴田先生、感想はいかがですか？

鶴田|アレクサさんが大変努力して素晴らしいものに仕上がったと思います。私は普段、通訳者として、また教える立場として、常々思うことは、結局、「何を伝えようと思っているか」ということが、伝わるのが大事だということです。やはり理解していないと本質がわからない。本質を捉えるということの大切さですね。通訳もそうですが、言葉に囚われてしまうと、決してそこに到達することができません。岡本先生の講演の中にありましたが、中国のカリスマ・シェフ、包丁(ほうてい)が牛を裁く妙技は、牛という外見に囚われずに、牛が骨と筋に見えるからこそのできるのでしょう。そして、それが全て自然体で出来るのが「心の技」だということです。そのためには、本質を捉えることが必要です。更に素晴らしいことは、それが自然体で出来ること。極めることで、その境地に到達できればと思います。

岡本|それはどんなことにも通じることでしょうか。今日はインドからもサンジープ・スィンハさんがお出でになっています。何か質問はありますか？

スィンハ|文化と価値観と哲学の関係は、どのように考えればいいのでしょうか？



伊藤|人間の暮らしと、自然環境の違いで文化の違いが生まれます。日本で考えると、北と南に分かれます。北の気候が厳しい青森のような所でも、縄文時代の人たちは狩猟採集生活をしてながら定住していました。自然は人間に優しく、非常に豊かな環境の中、魚と木の実が豊富なので、狩りをして獲物を追いかけることはなかった。そして、そのような自然と人間の関係から日本的な文化というものが出来てきます。価値観は文化をベースにするけれど、その人の生き方や、家族の価値観にも影響されますよね。また、「他の国で生活した経験があるのか？」ということも影響をします。哲学は、それらを徹底的に考え抜いて、一つのシステムにするのです。文化がベースとなって、そこに、ある程度、哲学や価値観が反映されて個人としての哲学が構成されています。ですから、人によって哲学のあり方は皆違う。中国でも、北の自然環境が厳しい所は、厳しい戒律的な儒教が中心であり、南のような自然環境の豊かな所は、ゆったりとした、論理的というよりは直観的な考え方が支配的というような違いがあります。日本人はあまり論理的ではないので、日本に哲学はなしと言われています。しかし、岡本さんの言われた「アート・オブ・ライフ」というようなレベルでは、いろいろなことを直観的に感じたものが出てきました。それが、例えば禅、禅宗であったりしたわけです。これらは哲学とは異なったものですが、一つの世界観や価値観になりますよね。

岡本|アメリカでは、今、金融の問題がいろいろ起こっています。その改善策は、一番はルールの強化であり、2番目に出てくるのが倫理ですね。一方、日本的なアプローチでは、強欲であることを止めて、「知足」の心を持ちましょうというようなところへ議論が落ち着く。倫理と知足とどう違うのかというと、知足は一人一人の心の在り方であって漠然としている。倫理の場合は、その後ろ側にルールみたいなものを作ってしまえばいいというような気がして、その辺は違う様に感じますね。日本やアジアは、自然と共生している中で、再生可能エネルギーとい



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

う話が出てくるのでしょうか。そういう意味では、伊藤さんの話と私の話は一連の流れでつながっているといえます。クラウド・ファンディングのように、「みんなでお金を出し合ってやろう！」というのは、農業的な発想なのかもしれません。

鶴田| 何をもって知足なのかというところは、岡本先生の講演の最後におっしゃった「しあわせ持ちになること」という言葉に尽きると思います。幸せになるという言葉は漠然としていますが、自分だけではなく、社会もそうだし、ひいて言えば、世界に対してどのような形で貢献できれば自分が幸せと感ずることができるのかという、そこに至るまでの考え方が様々ですね。

岡本| 結局、しあわせ感とはどういうものかという、究極的には「利他」の感情だという気がします。やはり、他人に喜ばれるということが、ある意味、究極の幸福感だと感ずます。

伊藤| 僕は最近、「ハピネス」の上に「ウェルビーイング」があると考えています。良い暮らしというのは、主観的な面と客観的な面がある。例えば「きれいな水が飲める」とか、「適当な温度で暑すぎない」というウェルビーイングについても、その客観的な面を認識しないと、「環境が悪くなくても私だけ幸せならいい」というような話になってしまう。主観的な面でのハピネスは、ウェルビーイングの一部だと客観的に捉えないといけないと思っています。自然エネルギーもそうですが、外に目を向けるのは重要です。

岡本| 主観に埋没していないで、いつも外から自分を見る、客観的な目が必要だということでしょうね。

伊藤| もう一つ、ハピネスのことを言うと、日本は幸福度の指標で、OECD の中でも高い方にありますが、一つだけ異常に下の方にあるものがあります。それは女性の生き方、社会進出ですね。だから、すごくバランスがとれていません。1994 年を境にして、共働き家庭の数が、片働きの世帯を上回っています。今、一千万世帯位あると思います。「2 人でやりたい」という場合と、「2 人でないとやっていけない」という両方がありますが、そこで生活設計上、問題になるのが出産です。女性が仕事について、これから大きな役割を担うという時に、出産という問題が出てきます。先に生むのか、後で生むのかという選択肢がありますが、もし後を選択しでずるずるいくと、40 歳位になってしまう。そうすると、流産率がかなり高いですね。よくワーク・ライフ・バランスと言いますが、あれば「ワークの方から見てライフとバランスをとりあえずとろうね」という感じなので、「出産は、仕事をまず考えてから」となりがちです。夫婦でそのバランスをどうやってとるのか、すごく大きな問題であり、それは企業や社会の在り方にもつながってきます。都市部ですと、子育ての社会的な装置が弱い。それも問題ですね。出産、子育てが遅れると、長い老後に医療等いろいろ問題がでてくる。出産ということをしっかり生活設計しないと、全部後ろに行ってしまう。よく全体のライフプランを考えて、いつどういう風にリスクをできるだけ取らないで子供を産むのか、仕事をするのか、かなり緻密に考えないと



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

いけない所に日本は来ていますね。

岡本| 今までの日本は、日本人が集まって、しかも男と女で違う世界に住んでいた。男社会がいいか悪いかという問題ではなく、違った世界に住んでいた。日本の男は会社に勤め、多様性のない曖昧模糊たるものが許容されている環境に住んでいた。日本が、アメリカのように、外国人や女性がどんどん入ってきて職場に就く。そういう多様性へと変わってきた時に、今まで曖昧として、なんとなくみんなで「そうだよな」と分かりあってきた部分がどんどん崩れ、全部、細かく法律で規制していかなければならなくなっている。必然的な傾向なのだと思いますが、なにか少し淋しい感じがしますよね。日本的なものが失われていくのかなと。曖昧とした知足というよりも、「税率をどうするか？」という話の方にいきそうな気がします。多様性というものが押し寄せてくる中で、日本人全体がどのように価値観を形成していくのか、非常に難しいと思います。

伊藤| 戦争中は、国家中心の集団主義、戦後は企業依存の集団主義で、この企業依存の集団主義がはっきり崩れたのが、1989年だと思います。そこから20年間リストラ等いろいろなことがあり、企業は個人の面倒を一生見てくれないということが嫌というほどわかった。一方で「自立」ということで、バラバラになりましたよね。バラバラになって社会環境の安定が崩れ孤独になると、デュルケームの自殺論ではないですが、自殺する人の割合が増え、年3万人が自殺した。それでは何をよりどころに、日本に価値観を再構築していくかということ、基本は、個人主義しかないですね。個人で考えて、その上でどうやって協調を図っていくのか。過去の地域の文化的遺産にべたっと張り付くのではなく、過去の遺産は我々の貴重な資本として、活用できるものを生かしていくべきでしょう。「集団の中に埋没するのはやってられない！」という思いが、日本の中にもあります。やはり個人個人を尊重して、個人主義だけど、横にもつながるというのが今でいうソーシャルです。横につながらないと人間生きていけない。その張り方について昔あった資源は、活かすに足りるものですよね。アメリカのソーシャル・キャピタルの概念は、社会環境を構築してくるものは、一つの資本であり、それが強い地域とそうでない地域では、文化程度も環境も違って来る。日本でも同じことが言え、社会関係資本、ソーシャル資本のベースに文化というものがあり、それを再発見する過程が今かなと思います。

岡本| インベストラ이프 8月15日号でフランソワ・カントンさんのコメントの中で、今、ユーロが抱えている一番の問題は、イタリアとかスペインの地域の人々の職がないことだと。技術がある人は、ドイツへ単身赴任で行く。あまり技術がない単純労働の人は、モロッコやアンゴラへ出稼ぎに行く。月給も安く、生活費も安いのでそこで働き、家族に仕送りをする。家族は、例えば、コストの安いスペインの北へ移住させる。要するに、ユーロの南の方は家庭が崩壊し始めているというわけです。経済的なユーロの問題はたくさんありますが、社会的なものを、これからユーロを考えていく上でものすごく大きな問題になるのではないかと断言しています。確かに、



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

家族というミクロ的なソーシャル・キャピタルというものの価値も考えるべきでしょう。日本では、家族を曖昧とした表現で絆という形になるのかもしれませんが。一方では、パソコンを通じてでしか、コミュニケーションがとれないような状態にもなっています。これからどんな状態になるのかわからないですけどね。今日はありがとうございました。



中国がわかるシリーズ13 [東]漢の衰亡

ライフネット生命株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明

2世紀に入ると、[東]漢では幼帝が相次ぎ、皇太后とその一族(外戚)の専横が目立ち始めました。成長した皇帝は宦官を頼って外戚に対抗することになります。力をつけてきた官僚(知識人)も、そこに一枚加わるようになります。外戚は母系制社会の名残で、父系制を指導原理とする儒教が広く浸透すれば、外戚の勢力は自ずと弱まっていくことになります(実態的には母系制社会であったわが国の平安時代に、外戚の藤原氏が専横を揮ったことは象徴的です)。[西]漢では、一般の役人も内廷に仕えていましたが、光武帝以降、内廷の業務は宦官に限られるようになります。この状態で、無能な皇帝もしくは幼帝が即位しますと、絶大な皇帝権力を背景に、宦官が跋扈する余地が生じます。166年には党錮の獄と呼ばれる政変が起こり、多くの官僚(宦官に対して清流派と自称)が排斥されました。この年、マルクス帝の使節と自称する者(インド商人?)が、ベトナムを経由して中国を訪れています。[東]漢の西域支配は終わっていましたが、海路は間違いなくローマまで通じていたのです。メコンデルタからは、マルクス帝の貨幣が、洛陽郊外からは、ローマングラスが出土しています。もっとも、活発な交易は、金(地金)の流出を招き、中国国内のマナーサプライを低下させました。この結果、商業が衰退し、富者は土地を購入して、大地主(貴族)化していったのです。

2世紀の後半頃から、中国の気候は寒冷期に入っていきます。この寒冷期は、約400年続くこととなります。農業生産に多くを頼っていた古代社会では、気候の寒冷化は、生産力の低下を意味し、強大な統一国家の維持が難しくなります。また、寒冷化の影響をより強く受ける北方の遊牧民が南下を始めます。こうして、3国時代が幕を開け、中国は長い分裂の400年を迎えることになるのです。この時代に、相次ぐ天災や飢饉(災害年の割合は、[西]漢15%、[東]漢61%という試算もあります)によってもたらされた社会不安の高まりとともに、西国から持ち込まれた仏教にも刺激されて、老荘思想を中核にした新興宗教(道教)が起こります。張角の太平道や張陵が四川で起こした五斗米道が有名です(張陵の孫、張魯は、漢中で30年近く宗教王国を維持した後、曹操に投降しました。その子孫は、江西省龍虎山を本拠とする道教のプリンス、天師として、孔子の子孫同様に尊ばれ、今なお現存しています。孔家が82代、張家が64代、おそらく世界最古の万世一系の家柄でしょう)。自然災害が多発する時代にあっては、死後の永遠の生命より、目前の現世のご利益の方が切実でした。罪の懺悔と呪術によって心身の病を癒す道教が、広く浸透したの



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

は、このような時代の要請にマッチしていたためであると考えられます(葬礼も厚葬から薄葬へと変化しました)。「東」漢の 11 代、桓帝は、165 年、1 年間に 3 回も老子を祀って長生を祈願しましたが、この時代の風潮をよく表していると思います。

184 年、張角が、黄巾の乱を起こしました(蜂起者は黄色い布で頭を包みました。五行思想によると、「漢の赤」の次の王朝のシンボルカラーは黄色ということになります)。黄巾の乱は 1 年足らずで鎮圧されましたが(在地の豪族である曹操や孫堅も活躍しました)、「東」漢の屋台骨は大きくぐらつき、反乱が相次ぐようになりました。189 年、外戚の何進が宦官の撲滅を図って逆に殺され、その直後、名族の袁紹が都に入って宦官を一掃しました。この権力の空白時期に、洛陽に入った董卓が、「東」漢最後の皇帝、14 代、献帝を擁立し、群雄割拠の先駆けを果たしたのです。董卓は、190 年、本拠地に近い長安遷都を強行しましたが、部下の猛将、呂布に殺されてしまいます。わが国でも人口に膾炙している三国志の時代が幕を開けようとしています。

この頃、倭国では、争乱が続いた末に卑弥呼が共立され、王位につきました。192 年には、ベトナム中部に、チャム族がヒンドゥー文化を受容したチャンパ(林邑、宋以降は占城と表記)王国を建国しました。一般に、東南アジアでは(古くから中国と関係が深い北ベトナムを除いて)インド文明の影響がより強く見られます。膨大な漢籍の理解を前提とした中国文明より、インド文明の方がより受容し易かったということではないでしょうか。



I-OWA マンスリー・セミナー講演より

老荘に学ぶリラックス投資術

講演:岡本 和久、レポーター:川元 由喜子

老子や荘子が生きたのは春秋から戦国時代、君主がどのように国を治めていくかというのが非常に大きなテーマで、多くの思想家が競い合って議論する百家争鳴の時代でした。国を治めるのと資産運用とは、実は非常に似た部分があります。金融資産のポートフォリオが自分の国、それを行政単位に分けて治めるように、資産クラスごとに分けて一番いい「長」を選ぶ。「長」は投資信託で、「民」に当たる銘柄をたくさん持っているというわけです。

老荘思想のいちばん基本にあるのは「道(タオ)」といって、宇宙という現象が出来あがる前からあった法則性、自然法、時空を超越したエネルギーのようなものだと私は理解しています。老子も荘子も、タオに沿った生き方こそ、我々が最もリラックスできるということを知ったのです。その教えの中から、投資にも生き方にも役に立ついくつかをご紹介します。



最初の教えは、「気宇壮大な視座を持つ」。胴体は何千里もある鵬が遥か南を目指し、9万里の高さを飛び続ける。地上では小さい動物たちが鵬を笑う。しかし、小さい世界に住む者には想像もつかぬ大きな世界がある。短い時間に囚われているものは、大きな時間の流れを想像もできない。この例え話は短期投資家と長期投資家を思わせます。

タオというのは固定したものではなく、常に変化しています。これはマーケットも一緒です。「これはこういうものだ」と定義づけると、もう次の瞬間には変わってしまう。常に変化してやまない中で、陰陽は巡っている。何かいいことがあれば、実はその中に悪いことがあり、悪いことが起これば、その中にはいいことが隠れている。株価の変動は、常に変化していて、同時に陰と陽がバランスしているという、タオの動きの本質を思わせます。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

「本質を見よ」、そして「ノイズに超然とせよ」。これについては「木鶏たれ。」という例えがあります。闘鶏は、殺気立って相手を求めたりいきり立ったりする間はまだまだ。他の鶏がどんなに鳴いても動ぜず、まるで木彫の鶏であるかのようになれば、自然の徳が備わって、姿を見ただけでどんな鶏も逃げ出すでしょう。国内外の名だたる投資家は、株価や他の投資家の動きからは常に距離を置き、超然としてひたすら自分の信じる価値の本質を見て投資を行う。それはまさに「木鶏」の心境です。

そして、考えすぎではいけない。特に老子はこれを繰り返しています。「無為を為せば治まらざるなし。」要するに作為をなしちゃいけない。小賢しい知恵と欲望を捨てて、自然の流れにあったことをしていれば、おのずと物事はうまく行く。とにかくシンプルに考えなさい、という教えです。

講演ではこの後も、示唆に富んだ例え話とともに、老荘の教えが続きました。項目だけ以下に挙げますと、「区別せず、全体を見よ」、「急がない」、「無駄をしない」、「争わない」、「欲張らない」、「孤独な道を歩む」、「良き君主であれ」。いずれも投資に通じるものがあり、心に留めおきたい教えです。講演の最後には、リラックス投資の実践にあたって、具体的なアドバイスもいただきました。

<モデルポートフォリオ:2013年9月末の運用状況>

単位: %

		トータルリターン				リスク	1万円ずつ積み立てた場合の投資額に対する騰落率			
		1か月	1年	5年 (年率)	10年 (年率)	10年 (年率)	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月~ 165万円
4資産型	積極型	5.66	48.68	5.47	5.19	16.32	20.03	46.46	34.68	40.95
	成長型	4.11	35.13	4.68	4.59	11.52	14.19	34.26	29.44	37.47
	安定型	2.56	22.63	3.61	3.76	7.26	8.66	22.57	23.34	32.45
2資産型	積極型	4.57	43.10	6.10	6.52	18.57	16.95	48.30	41.21	50.97
	成長型	3.60	34.19	5.06	5.57	13.63	13.05	36.80	34.49	45.92
	安定型	2.63	25.73	3.70	4.37	9.33	9.29	25.76	26.72	38.92

* 投資にかかるコストは控除していない。積み立ては、税引き前分配金再投資。ポートフォリオは毎月リバランスをしたものとする。
 積み立ては計算月数分を運用したものとする。例えば1年の場合は2012年9月末に1万円投資資金を積み立て始め、2013年8月末の投資資金までとする(2013年9月末積み立て分は運用期間がないため含めていない)。
 出所: イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがMorningstar Directにより作成。MorningstarDirectについてのお問い合わせは「投信まとなび」のお問い合わせメール(<https://www.matonavi.jp/inquiry>)にてイボットソン・アソシエイツ・ジャパンまで。

ポートフォリオの資産配分比率(外貨建て資産は円換算ベース)

4資産型		国内株式: TOPIX	外国株式: MSCI KOKUSAI	国内債券: NOMURA- BPI (総合)	外国債券: Citi WGBI (除く日本)
		積極型	40%	40%	10%
成長型	25%	25%	25%	25%	
安定型	10%	10%	40%	40%	

2資産型		世界株式: MSCI ACWI (含む日本)	世界債券: Citi WGBI (含む日本)
		積極型	80%
成長型	50%	50%	
安定型	20%	80%	

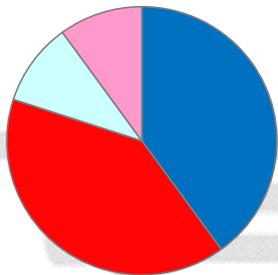
ポートフォリオは「インベストラ이프」が参考のために考案した資産配分に基づき、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがデータを算出しています。
特定の資産配分による投資の推奨を行うものではありません。

「長期投資仲間」通信『インベストラ이프』のその他の記事はこちらからご覧ください。
<http://www.investlife.jp/>

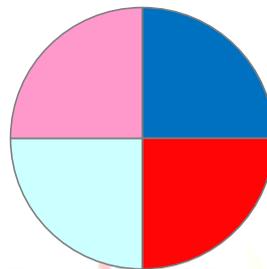
4資産

- 国内株式: TOPIX
- 外国株式: MSCI KOKUSAI
- 国内債券: NOMURA-BPI (総合)
- 外国債券: Citi WGBI (除く日本)

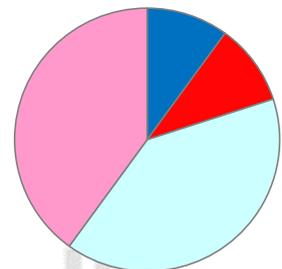
積極型



成長型



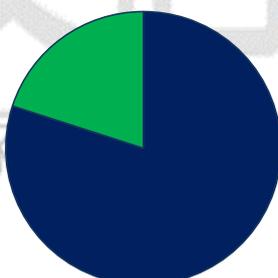
安定型



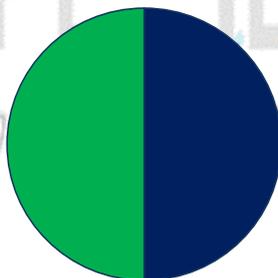
2資産

- 世界株式: MSCI ACWI (含む日本)
- 世界債券: Citi WGBI (含む日本)

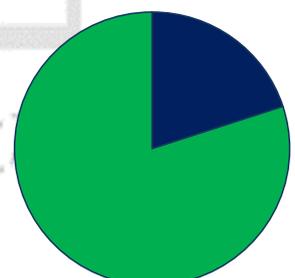
積極型



成長型



安定型



<純資産上位ファンド(毎月および隔月決算型を除く):2013年9月末の運用状況>

当資料は「インベストライフ」のために、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがデータを算出、作成しています。特定の投資信託による投資の推奨を行うものではありません。
※ファンド名をクリックすると「投信まとなび」でそのファンドを見ることができます。

「長期投資仲間」通信「インベストライフ」の
その他の記事はこちらからご覧ください。
<http://www.investlife.jp/>

今回 順位	前回 (13年 6月末) 順位	運用会社名	ファンド名	トータルリターン				リスク 10年 (年率)	1万円ずつ積み立てた場合の 投資額に対する騰落率				1万円ずつ積み立てた場合の 月末資産額				2013年 9月末		イボットソン 分 類
				1ヵ月	1年	5年 (年率)	10年 (年率)		1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月～ 165万円	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月～ 165万円	純資産 (億円)	基準価額 (円)	
1	1	フィデリティ投信	フィデリティ・日本成長株・ファンド	9.83	61.87	4.77	2.70	21.19	27.55	46.57	24.02	25.27	15.31	87.94	148.83	206.70	3,663.6	14,965	国内株式・大型成長型
2	2	さわかみ	さわかみファンド	8.79	66.59	5.43	4.19	20.10	27.75	40.29	24.39	35.42	15.33	84.17	149.27	223.45	3,062.2	16,269	国内株式・大型ブレンド型
3	3	日興AM	インデックスファンド225	8.52	64.84	6.52	4.58	21.45	27.56	53.94	35.79	36.94	15.31	92.37	162.95	225.95	2,510.4	3,936	国内株式・大型成長型
4	4	JPモルガン	JPMザ・ジャパン	17.87	137.43	24.86	18.52	33.99	53.77	142.84	172.85	278.89	18.45	145.71	327.42	625.17	1,932.5	47,044	国内株式・中型割安型
5	5	みずほ投信	MHAM株式インデックスファンド225	8.49	64.74	6.40	4.51	21.36	27.47	53.70	35.26	36.14	15.30	92.22	162.32	224.63	1,744.4	2,646	国内株式・大型成長型
6	6	DIAM	日経225ノーロードオープン	8.52	64.08	6.10	4.20	21.37	27.23	52.36	33.32	33.54	15.27	91.42	159.99	220.34	1,430.1	9,605	国内株式・大型成長型
7	7	ニッセイAM	ニッセイ/パトナム・インカムオープン	0.09	24.40	4.33	2.46	9.73	6.11	26.49	23.32	26.91	12.73	75.89	147.98	209.40	1,276.1	6,349	外国債券・米国型
8	9	三菱UFJ投信	三菱UFJ インデックス225オープン	8.54	65.18	6.64	4.68	21.45	27.69	54.24	36.38	37.76	15.32	92.55	163.66	227.30	1,168.1	9,048	国内株式・大型成長型
9	8	日興AM	GW7つの卵	4.16	38.49	4.96	3.88	14.10	15.82	35.61	24.14	-	13.90	81.37	148.97	-	1,165.8	9,817	アセットアロケーション ・積極型
10	11	野村AM	ノムラ日本株戦略ファンド《Big Project -N》	8.55	64.00	4.59	3.29	20.25	27.01	48.35	24.48	-	15.24	89.01	149.38	-	1,007.9	6,960	国内株式・大型成長型
11	10	三井住友AM	トヨタグループ株式ファンド	6.40	97.72	10.80	-	-	36.40	83.79	-	-	16.37	110.27	-	-	998.9	19,417	国内株式・地域 /グループ型
12	36	三菱UFJ投信	三菱UFJ Jリートオープン(3ヵ月決算型)	16.68	57.28	13.81	-	-	24.43	80.89	-	-	14.93	108.53	-	-	922.6	6,590	国内REIT
13	12	大和投信	ストック インデックス ファンド225	8.52	64.73	6.45	4.51	21.43	27.50	53.77	35.41	36.33	15.30	92.26	162.50	224.94	863.6	6,466	国内株式・大型成長型
14	26	国際投信	成長株ジャパン・オープン	16.75	125.62	-	-	-	48.67	-	-	-	17.84	-	-	-	813.3	20,959	国内株式・中型ブレンド型
15	14	フィデリティ投信	フィデリティ・ジャパン・オープン	9.84	61.75	4.75	2.71	21.29	27.50	46.69	24.11	25.48	15.30	88.01	148.93	207.04	811.4	10,507	国内株式・大型ブレンド型
16	13	野村AM	グローバル・ハイインカム・ストック・ファンド	4.37	42.30	6.17	-	-	15.64	48.11	-	-	13.88	88.87	-	-	805.7	7,602	外国株式・世界型
17	15	HSBC投信	HSBC ブラジル オープン	11.57	12.74	6.04	-	-	0.29	11.88	-	-	12.04	67.13	-	-	772.1	9,645	外国株式 ・新興国型(単一国)
18	17	野村AM	野村日本高配当株プレミアム (通貨セレクトコース)年2回決算型	10.55	56.70	-	-	-	19.36	-	-	-	14.32	-	-	-	762.8	15,753	国内株式・セクター型
19	18	フィデリティ投信	フィデリティ・日本配当成長株・ファンド (分配重視型)	7.59	58.09	6.22	-	-	24.41	45.37	-	-	14.93	87.22	-	-	716.1	8,579	国内株式・大型割安型
20	16	国際投信	グローバル・ソブリン・オープン (3ヵ月決算型)	1.95	18.93	1.38	2.58	9.45	4.28	15.24	13.99	24.70	12.51	69.14	136.79	205.76	709.8	6,343	外国債券・世界型

対象は追加型株式投資信託のうち2013年9月末時点で1年以上の運用実績があるもの(毎月・隔月決算型、ETF、DC・SMAなど専用投資信託を除く)。

積み立ては税引き前分配金再投資、計算月数分を運用したものとす。例えば1年の場合は2012年9月末に1万円で積み立てを開始し、2013年8月末投資分までの2013年9月末における運用成果とする(2013年9月の積み立て額は入れない)。

出所: MorningstarDirectのデータを用いてイボットソン・アソシエイツ・ジャパンが作成。MorningstarDirectについてのお問い合わせは「投信まとなび」のお問い合わせメール (<https://www.matonavi.jp/inquiry>)にてお気軽にご送信ください。